

## 論文

# 認知症高齢者の攻撃性に対する 赤ちゃん人形療法の効果



畑野 相子<sup>1)</sup>、北村 隆子<sup>1)</sup>、安田 千寿<sup>1)</sup>、嶋田 裕子<sup>2)</sup>、御船 泰秀<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 滋賀県立大学人間看護学部

<sup>2)</sup> 介護老人福祉施設 真盛園

<sup>3)</sup> まほまほドールセラピー研究会

**背景** 高齢化と共に、認知症高齢者は増加している。認知症高齢者のケアで難しいのは心理・行動症状への対応である。心のケアとしてさまざまな非薬物療法が試みられている。人形療法もその一環として位置づけられるが、研究はあまり進んでいない。

**目的** 心理・行動症状の攻撃性に視点をあて、赤ちゃん人形療法の効果を検証することを目的に介入研究を行った。

**方法** 介護老人福祉施設に入所している1組の認知症のある高齢者夫婦。主として、攻撃性を有する妻を対象に、1年間、赤ちゃん人形療法を行った。

**結果** 妻の攻撃性は、介入後1か月頃からなくなり、夫に対する不満や嫉妬心は介入後4か月から徐々に軽減し、その後はなくなった。それだけでなく、夫を思いやる言動が見られるようになった。そして、介入後6か月が経過した平成22年1月末から夫婦が同室で生活できるようになった。

**結論** 赤ちゃん人形療法により攻撃的言動は減少した。その要因として、以下のことが示唆された。

1. 認知症高齢者が、赤ちゃん人形に自分の気持ちを投影し、そのことで安心感を得ることができる。赤ちゃん人形は認知症高齢者の心理の移行対象となっている。
2. 赤ちゃん人形療法に対象者の状況に合わせた方法を取り入れると相乗効果が得られる。
3. 赤ちゃんの特徴である、可愛さ、小さい、柔らかさは笑顔を誘い、これが快の感情を優位にし、気持ちの安定につながる。

**キーワード** 赤ちゃん人形療法 攻撃性 認知症高齢者 非薬物療法  
行動・心理学的症状 (BPSD)

## I. 緒言

国立社会保障・人口問題研究者が平成18年12月に推計した将来人口によると、65歳以上の老年人口が総人口に占める割合は、平成17年では20.2%であったが、平成27年には40.5%に達すると予想されている<sup>1)</sup>。高齢社会における最大の健康課題は介護予防であるが、要介護認定者の概数は、平成14年では303万人、平成17年では411万人、平成21年では469万人と年々増加している。平成14年の要介護（要支援含む）認定者（第1号被保険者）のうち「何らかの介護・支援を必要とする認知症がある高齢者」は約149万人(47.5%)で、要介護者の2人に1人は

認知症を有している<sup>2)</sup>。老年人口の増加に伴い、認知症をもつ高齢者の概数は平成17年で180万人であったが、平成27年には300万人に増加すると推計されている。認知症の有病率は、前期高齢者では2～3%、後期高齢者では10%、85歳以上になると25%と推計されている<sup>3)</sup>。このような現状から、介護予防の中心的課題は認知症の予防・ケア対策である。

認知症とは、いったん知能を獲得し成熟した脳組織が後天的な器質的変化により持続的に損傷され、病前にあった知能を中心とする精神機能が低下し、そのため日常生活に支障をきたす症状の総称である。したがって、認知症の中心となる症状（中核症状）は記憶機能と理解や認識などの認知機能の障害である。知的能力やこれまでの生活史や人間関係は、人が生きていくうえでの拠り所であり、これを失うことは不安以外の何物でもない。室伏は認知症高齢者が生きる拠り所を失うことにより、存在不安が生じることがQOL(Quality of Life) を考える上で

2010年9月30日受付、2011年1月9日受理

連絡先：畑野 相子

滋賀県立大学人間看護学部

住 所：彦根市八坂町2500

e-mail: ahataano@nurse.usp.ac.jp

の本質的課題であると指摘している<sup>4)</sup>。存在不安とは、ここでずっと安住して暮らしていけるかどうかという、人間の根源的な不安である。

知的機能障害を背景に、このような不安感などの心理的要因が作用して、幻覚や徘徊などに代表される行動・心理学的症状(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia :以下BPSDとする)が出現する。BPSDは個人差が大きく、全く出現しない人もあれば、激しい症状を呈する人もあり、症状も様々である。人は、不安が生じると、対処行動をとり、不安軽減の緩和に努める。しかし、認知症は知的機能低下を伴うことから、自分の不安やストレスの原因を自覚して対処したり、他者に伝え支援を求めることが難しい。不満や不安等が軽減されない状態が持続した結果BPSDが出現する。従って、BPSDには原因があるが、周囲にはその原因が容易に理解できないので、対応に苦慮する。介護する者にとってBPSDは困った行動と認識され、当事者や家族の生活のしづらさの原因になっている。認知症高齢者のケアを考える上で大切なことは、不安や焦燥感やストレスなどに目を向けて対処することである。

認知症高齢者の心のケアについては、様々な非薬物療法が治療戦略の一翼を担っており、代表的なものとして精神療法、認知行動療法、心理教育などがある。ドールセラピーはダイバーショナルセラピーの一つとして我が国に紹介された<sup>5)</sup>。そして、2001年6月にNHK番組「関西クローズアップ現代」で、人形を抱いた高齢者が活き活きとした自分を取り戻している姿が放映され、人形が心のケアに大きく役立っていると報じられた。それを契機にドールセラピーに対する関心が一挙に高まり、積極的に取り組まれたが、その後発展することはなかった。ドールセラピーに関する先行研究も数少なく、研究は緒についたところである<sup>6-8)</sup>。

しかし、人形を抱き、いつくしんでいる高齢者は実在する。人形を抱いて過ごせば療法になるわけでない。高

齢者の生活背景と人形を抱くことの意味を理解したかわりこそ療法といえるものである。高齢者が人形を抱く意味を明らかにし、赤ちゃん人形療法として確立することは、高齢者のQOLを高めるケアの一助となる。

親松らは、人形を抱いて生活していた認知症高齢者を介護していた人々から聞き取りをし、認知症高齢者が人形を抱くことの意味を、「老いによるさまざまな喪失を、生きてきた証としてつなぎとめる役割としての人形があった」と述べている<sup>9)</sup>。

筆者は、平成19年からグループホームの協力を得て、赤ちゃん人形療法の効果と効果的な人形の素材を開発することを目的に、介入研究に取り組んできた。その結果、赤ちゃん人形を用いた効果として、①暴言や暴力等の行為等が緩和した(2事例)、②重度認知症による失語症を有するひとが、「冷たいね」など意味ある言葉を発した(1事例)、③淋しさが緩和した(1事例)を得た<sup>9)</sup>。赤ちゃん人形を可愛がることにより、暴言や暴力が緩和したことについて、「世話をする」「育てる」という母としての役割、あるいは母として果たしたかった役割を、人形に移行して再現することで欲求が満たされ、精神的安定を得たのではないかと考察した<sup>9)</sup>。しかし、事例数も少なく、その成果を普遍化するには至っていない。

そこで、本研究では、認知症高齢者のBPSDの1つである攻撃的行動に視点をあて、その緩和を目的に赤ちゃん人形療法を行い、ケアの有効性を検証することを目的とした。

## II. 概念枠組み

Kitwood T. は認知症の人の心理的なニーズを5辨の花にたとえ、その中心に愛(Love)をおき、それを取り囲む花びらとして、愛着(Attachment)、慰め(Comfort)、アイデンティティ(Identity)、役割(Occupation)、帰属意識(Inclusion)を挙げている。

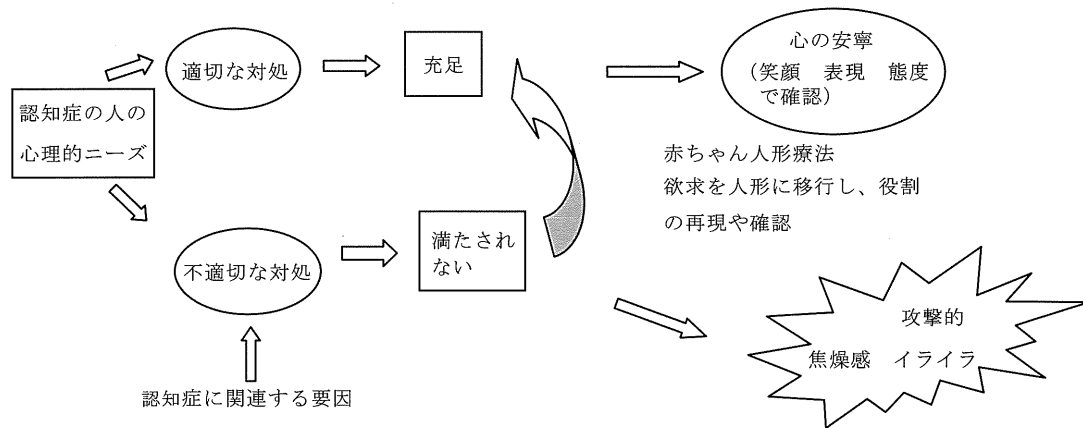


図1 概念枠組み

この5つの要素のうち、どれかが満たされると波及効果を及ぼし、心の安寧につながるとしている<sup>12)</sup>。

ヒトはニーズを満たすために様々な行動をとり、気持ちの安寧を図っている。しかし、認知症を発症すると、中核症状である記憶障害や認知機能の低下により、適切な行動がとれず、ニーズが満たされにくくなる。この状態が持続するとBPSDとして出現する。赤ちゃん人形療法を行うことで、高齢者自身が赤ちゃん人形に自分のニーズを投影するか、あるいは世話をする対象としての意味を見だし、愛を取り巻く5つの要素のいずれかを満たす。そして、要素間に波及効果が生じ、心の安寧を取り戻し、攻撃的なBPSDは軽減されると予測した。概念枠組みを図1に示した。

### Ⅲ. 用語の操作的定義

赤ちゃん人形療法とは、療法として確立されたものではない。ここでは、赤ちゃん人形を媒体にして、対象者と支援者がコミュニケーションをとりながら行うケア全般とし、その手順は以下の通りとした。

#### 1. 赤ちゃん人形を用いるケアの前提の確認

介入するにあたり、赤ちゃん人形を用いたケアの前提として、次のことを関係者間で確認したい。赤ちゃん人形療法は、高齢者が持っている能力を引き出す手段である。従って、赤ちゃん人形に特別の力があるのではなく、高齢者自身が赤ちゃん人形に何かを見出して、感情を表出したり潜在していた能力を発揮するのである。その過程に赤ちゃん人形が介在するので、赤ちゃん人形を抱いてもらえばなしにはしない。また、赤ちゃん人形を「モノ」として扱うのではなく、「ヒト」として大切に扱う。

#### 2. 初回導入時の進め方と注意点

対象者の自尊心を傷つけないために、対象者のために人形を準備したとするのではなく、「職員が人形を買ってきたので、見てください」など職員主語で話しかける。もしくは、数体の人形をみせ、好みの人形を選んでもらうにする。具体的には、「私の赤ちゃんです。見てください。」「かわいい人形があったので思わず買ってきました。」と言うように話しかける。あるいは、2～3体の赤ちゃん人形を示し、「どの人形が好きか教えてください。」など好みのものを選択してもらうようする。

#### 3. 毎回のセッションの進め方

好みの人形が確定した場合は、その人形を用いる。赤ちゃん人形を対象者に手渡し、話しかける。対象者が赤ちゃん人形を抱かない場合は、職員が抱くか対象者の傍

表1 語りかけの参考例

- |                             |    |
|-----------------------------|----|
| ①子どものころ、人形で遊びましたか。          |    |
| ②人形を見て思い出すことや感じることを教えてください。 |    |
| ③子どもさんはおられますか。              |    |
| ④子育ては大変でしたか。                | など |

に置く。話しかける内容は自由とするが、話が出てこない時は参考例を参照に、語りかける。参考例として示した内容の一部を表1に示した。

セッション時間は、30分程度とし、長くても1時間を超えないようにする。セッション終了時は、本物の赤ちゃんと同様に認識している場合は「向こうで寝かせてきます」や「ミルクの時間です」等と話しかけ終了する。

#### 4. 赤ちゃん人形療法を中止するとき

対象者と赤ちゃん人形の共生関係が強くなり、対象者と赤ちゃんの2者世界が構築され、第3者を寄せ付けない状況になる危険性が生じた場合は、直ちに赤ちゃん人形療法を中止する。

## Ⅳ. 研究方法

### 1. 対象事例

介護老人福祉施設に入所している1組の認知症を有する高齢者夫婦を対象に、介入研究を行った。

### 2. 事例選定の理由

夫婦は同じ施設に入所しているが、妻の攻撃性が原因で、妻は1階、夫は2階と別々の階で生活していた。妻の攻撃性が軽減すれば、夫婦同室が可能であると考えられた。可能な限り、当たり前の夫婦として生活をしてもらいたいと考え、対象事例とした。

### 3. 介入期間

平成21年7月～平成22年8月

### 4. 用いた赤ちゃん人形

#### (1) 用いた人形の特徴

用いた赤ちゃん人形はNo1～No3の3種類で、その特徴を表2に示した。

No1：目は開閉し、マネキン人形様のリアルな顔。大きさ35cm……（以下リアル小と称する）

No2：目は開閉し、マネキン人形のリアルな顔。大きさ50cm……（以下リアル大と称する）

No3：目は開のまま、和風人形の顔。大きさ35cm  
……（以下和風と称する）

表2 人形の特徴

	No1	No2	No3
大きさ	35cm	50cm	35cm
重さ	1kg	1.5kg	800g
顔	リアル	リアル	和風
目	開閉する	開閉する	開いたまま
固さ	固い	固い	柔らかい
顎定	可	可	可
座位	可	可	可
素材	樹脂	樹脂	布製

(2) No1～No3の赤ちゃん人形を用いた根拠

筆者が平成19年に行った好まれる人形の素材の研究の結果、好まれる人形の共通の条件は、目は開閉するか開閉していることであった。重さは、高齢者の腕力を考慮すると1.5Kg以下が好ましいことが示唆され、大きさや顔や固さなどは、高齢者によって好みはさまざまであった<sup>9)</sup>。この結果を踏まえ、目は開眼しているか開閉することを絶対条件とし、前回の研究で好まれた人形を考慮してNo1～No3の3体を用いた。

## 5. 調査内容

### (1) 対象者の属性

- ①性別 ②年齢 ③子どもの数と子育て経験
- ④職業歴（時期、職務内容）
- ⑤趣味・特技（若い時の趣味・特技）
- ⑥認知症の程度

### (2) 日常生活の状況

- ①1日の過ごし方
- ②日常生活におけるコミュニケーションの手段と能力
- ③日常生活における行動障害の状況

### (3) 赤ちゃん人形療法時の観察項目は、表情、発言内容、人形に対する態度、夫に対する感情表出状況、攻撃的行動の出現状況

### (4) 他の働いかけを併用した時は、人形に対する態度、夫婦の関係、日常生活に必要な能力の観察をした。

## 6. 情報の集積方法

### (1) 赤ちゃん人形療法は施設の職員が行い、観察内容を記録してもらった。

赤ちゃん人形療法の実施する職員一人を決め、継続的に関わった。

### (2) 月1回、施設の職員と赤ちゃん人形療法の結果を

もとに事例検討を行なった。

(3) 赤ちゃん人形療法の頻度は1～2週間に1回程度とし、1回の時間は概ね30分程度とした。研究者も施設の職員と協力して、毎月1回程度、赤ちゃん人形療法の実際の場に参加し、観察内容をフィールドノートに記録した。

(4) 日常生活状況は、施設の職員から聞き取りをした。

## 7. 分析方法

(1) 対象の攻撃性や日常生活状況の変化を、観察記録、フィールドノート等から分析した。

(2) 対象の攻撃性の変化や日常生活における変化を、赤ちゃん人形療法時の対象者の反応と関連させて分析し、赤ちゃん人形療法の効果を検討した。

## V. 倫理的配慮

(1) 赤ちゃん人形療法の介入研究は、施設における生活支援の一環として実施した。

(2) 研究対象者及び家族に対して、研究の意義、目的、方法、予測される結果や危険性について文書により十分説明を行った。予測される危険性として、対象者の赤ちゃん人形に対する関心が強度に強まると2者間の強力な共生関係が生じ、第3者を寄せ付けなくなることを説明した。危険性が危惧された場合は、直ちに赤ちゃん人形療法を中止すると伝えた。併せて、参加は自由であること、参加を拒否しても何ら不利益を被ることはないこと、参加を途中で中止することも可能であること、観察内容は目的以外に利用しないこと、研究結果を論文として発表するに当たっては個人が特定される記載は一切しないこと、研究終了後は情報を破棄することを伝え、理解を得た。理解を求めた上で、対象者及び家族から同意書に署名をもらった。実施にあたっては、滋賀県立大学研究に関する倫理審査委員会の承認を得た。

(3) 調査内容の保管に当たっては、個人を特定できないようにして取り扱い、安全管理の徹底をはかった。

## VI. 結果

### 1. 事例紹介

(1) 夫（A氏）は91歳、認知症高齢者自立度はⅢb。日常生活動作（ADL）は、移動は杖歩行、食事と整容と排泄は自立、入浴は一部介助であった。A氏は、調理師として働いていたが、54歳で退職し、その後妻とともに養鶏、養蜂、農業等を営んでいた。日常生活状況は、いつも柔らかな表情で、2階のデイルームでソファに座って過ごすことが多かった。

- (2) 妻 (Bさん) は84歳、認知症高齢者自立度はⅢb。日常生活動作 (ADL) は、移動は歩行器使用、食事と整容と排泄は自立、入浴は一部介助であった。「肩が痛い」「膝が痛い」など不定愁訴が多く、日常生活状況は、痛みのせいもあり居室で横になることが多かった。ダイルームのテーブルに座って過ごすこともあったが、話し相手はいなかった。表情は、常に眉間にしわをよせ、不機嫌そうな表情をしていた。そして、「夫がちっとも会いに来てくれない」「夫が浮気している」と職員に訴えた。「ご主人のところへ行きましょうか?」と職員が声かけするも「行かない。向こうが会いに来るものや」との返答だった。時々2階へ会いに出向いたり、夫にも1階に来てもらい夫婦と一緒に過ごす時間を設けたが、いつも喧嘩になり、妻は夫が使っている杖で夫をたたたくこともあった。この施設の構造は、妻のいる1階に浴室があるため、入浴日には、夫は女性職員の手引き歩行で、浴室に向かうのが日課だった。それを見て、妻は、「若い女と浮気をしている」と言って怒り出すことが度々あった。家族も、夫婦と一緒に居るといつも喧嘩になるので、別々にしておいて欲しいと希望していた。
- (3) 夫婦の間に子どもは3人生まれたが、男児は腸閉塞で乳児期に死亡した。娘が2人あり、下の娘について、妻は「目が大きく、まつげが長かった」とよく話してくれた。娘がキーパーソンで、瀕回面会に来ていた
- (4) 妻は、若い頃、和裁や華道を習っていた。現在も、月に1回アクティビティケアとして、華道をしていた。

## 2. 取り組みの経過

### (1) 介入回数と頻度

実際に赤ちゃん人形療法が実施できたのは23回であった。介入頻度は月3回の時もあれば、月1回の時もあり、ばらつきがあった。平均すると、2週間に1回の頻度であり、時間は短くて15分、長くて60分、平均30分程度だった。

### (2) 介入の経過

介入経過は、赤ちゃん人形療法の対象として、誰にスポットを当てたかによって、大きく4つの時期に分けられた。第1段階は、妻のみを対象に赤ちゃん人形療法を試みた1~3回のセッションである。第2段階は、夫婦と一緒に居る場をつくり、夫婦それぞれに赤ちゃん人形療法を試みた4回~6回のセッションである。第3段階は、外出という働きかけと並行して、夫婦を対象に赤ちゃん人形療法を試みた7~12回のセッションである。第4段階は、夫婦同

室での生活が開始し、夫婦を対象に赤ちゃん人形を試みた13回~23回であった。

### (3) 各段階における夫婦の反応

#### ① 第1段階

妻が好んだ赤ちゃん人形はリアル大であった。人形を見て、「かわいい」「目が大きい」「まつ毛が長い」と言って笑顔で赤ちゃん人形を抱いた。「足が冷たいね」と語りかけ、足をさすったり、布団に入れる行動がみられた。青い服を着た赤ちゃん人形をみて、乳児期に腸閉塞で死亡した長男のことを語った。夫については、「夫が会いに来ない」と不満を訴えた。

「この子 (赤ちゃん人形) は何という名前ですか」という問いかけに、名前を付けることができなかった。

#### ② 第2段階

妻はリアル大を好み、人形を見て、「かわいい」「目が大きい」「まつ毛が長い」と言って笑顔で赤ちゃん人形を抱いた。夫にリアル小を渡すと「かわいい」といって笑顔であかちゃん人形を抱き、口づけ等をして可愛がったが、長時間抱くことはしなかった。夫が赤ちゃん人形を可愛がる様子を見て、妻は「汚い」ときつい口調で話した。夫婦と一緒にいても、喧嘩することはなく、妻が夫に暴力をふるうこともなかった。

この施設の構造は、妻が生活している1階に浴室があり、入浴日には、夫は女性職員の手引き歩行で浴室に向かった。妻は、その姿を見て「若い女と手をつないで、浮気している」と言ってヒステリックになった。そんな時、妻の話を聴き、赤ちゃん人形を渡すと笑顔になり、「かわいい」と言って抱き、落ち着きを取り戻した。そして、夫について「金はなかったがよく働いた。優しい人だったから、今までやってこられた」と繰り返して話した。

「この子 (赤ちゃん人形) は何という名前ですか」という問いかけに、名前を付けることができず、職員が「Mさん」(夫の名前にちなんだ名前)を提案して、それに決まった。その名前を呼んであやした。

#### ③ 第3段階

妻はリアル大を好み、人形を見て、「かわいい」「目が大きい」「まつ毛が長い」「冷たいね」と言って笑顔で赤ちゃん人形を抱いた。夫に対する暴力的行為は、見られなかった。「夫が会いに来ない」という訴えは激減し、月に1回程度となった。

「この子 (赤ちゃん人形) は何という名前でしたか」という問いかけには答えられなかった。新

たに「Gちゃん」(娘の名前)をつけ、その名前を呼んでかわいがった。

気分転換目的で、施設外で赤ちゃん人形療法を実施した。人形に対する反応は、「かわいい」「目が大きい」「まつ毛が長い」「冷たいね」と言って笑顔で赤ちゃん人形を抱き、施設内における反応と同じだった。暴力的言動が見られなくなったので、2010年1月末から夫婦同室に踏み切った。

#### ④ 第4段階

夫婦同室になってからは、「夫が来ない」という発言は無くなった。夫が女性職員に手引き歩行されて浴室に向かっている姿を見ても、「夫が浮気している」という言動はなかった。デイルームで2人並んで食事をとり、妻は何かと夫の世話をやいていた。夫婦同室になってから、「お父さんがいてくれるから安心、淋しくない」との発言が

あった。

「この子(赤ちゃん人形)は何という名前ですか」という問いかけには答えられず、新たに夫の名前をつけ、その名前を呼んでかわいがった。

赤ちゃん人形療法と並行して、日常生活の間隔を取り戻すことを目的にスーパーに買い物に行ったり、外食を試みた。外食の際、自分の漬物を夫に渡したり、お茶の心配をするなどの配慮が見られた。買い物では夫のズボンを選び、支払いもした。夫婦同室後、夫婦間でトラブルになることは全くなかった。

赤ちゃん療法開始して1年が過ぎた8月上旬に花火見学に出かけた。その時、夫は妻の背中に手を回し、妻は夫の膝に手いて花火を見ていた。

あかちゃん人形療法の実際を表3に示した。

表3 赤ちゃん人形療法の実際

月	回数	赤ちゃん人形療法時の状況								
		対象	使用した人形と渡し方	表情	人形に対する反応	発言など	夫婦の関係性	時間	その他	
第1段階	8月	1	妻	居室にリアル大と小の2体の人形を持って訪室。かわいい子見てください。	笑顔	手をさしのべ、胸に人形を抱えて頭をなでた。「かわいい」と言って抱き、「足が冷たい」と言って人形の足をさすった。「目目開いておばあちゃんと言って」など人形に話しかけた。「こんな子が欲しい」「足が丈夫なら世話をあげたい」[こりゃこりゃ]と言ってあやす。	「長男を亡くした」「娘があんじょうしてくれる」「お父さん」(実父)はお酒もタバコも吸う。	「主人は会いに来てくれない。」「若い人に手を引かれてる。」「結婚した家は財産が一銭もない所から家立てた。夫は酒もタバコもすわない真面目な人や」	20分	
		2	妻	リアル大の人形を持って訪室。赤ちゃん連れてきました。	笑顔	「かわいい」と目のあたりを触った。「この子男の子やな。うちも男の子産んだけど、腸閉塞で亡くした」「今は娘があんじょうしてくれる。病院に行くとき手を引いてくれる」「こんな子欲しいけれど、世話が大変」等の発言があった。ほっぺや手に触り、かわいいと何回も言った。	生まれた地では、昆布飴を婿養子が配るなどの話。最近おしっこが座ってもすぐ出ない。腎臓でもわるいのかな。	「5か月も今まで会いに来てくれない」「さみしい。もう離婚や。若いのがいいんやろ」「家に帰りたい」等の発言があった。	40分	
		3	妻	居室にリアル大と小の2体の人形を持って訪室。「どっちが可愛いですか」と語りかけた	笑顔	「どっちもかわいい」と言って頭をなでた。リアル大を胸に抱き語りかけた。「かわいい」を繰り返して、あやす、ほっぺに触るなどの言動があった。うちも男の子産んだけど、腸閉塞で亡くしたんや。今は娘が良くてくれる。	人形を棚にもたれかけ、「苦労して生きとやない」と語った。母親が変わって淋しかった。義母は恐かったけれど、習い事をさせてくれたことが今ではうれしい等、生育歴を話した。肩と手の痛み訴えた。	「5か月も今まで会いに来てくれない」「さみしい。もう離婚や。若いのがいいんやろ」「家に帰りたい」等の発言があった。	40分	名前をつけることができず

第 2 段	9月	4	夫婦	リアル大の人形を持って行き、「連れてきました」と妻に渡した。	笑顔	妻は人形を大事そうに抱いた。夫はそっとほっぺや指にさわり、あやした。夫に人形を渡すと、「かわいい」と言ってほっぺや口にチューをした。		夫は子どもの世話をしてくれたのかと妻に問うと「1回も世話などしてくれな返答だった。夫が可愛がる様子を見て、妻は「汚い」といった。	20分	
	10月	5	夫婦	リアル小の人形に赤い着物を着せて持って行き「かわいいでしょう」と声かけをし、夫婦の間に置いた。	笑顔	妻は「かわいいな」「私のことじっと見ている」との言動があった。性を尋ねると「顔が男の子や」と言った。赤い服を着ているが、男の顔やと言った。夫は「かわいい」と言ってほっぺに触った。「なんて言う名前ですか」と聞くも返答なし。職員が「まさお」と言うと、夫は「まさお」といって可愛がった。妻は赤ちゃん人形療法実施中落ち着いていたが、終了後はウロウロしだした。「小さいな。ばあー」といってあやした。「この子いくつ？」との質問をしてきた	うちのお父さん京都にいかはった等の生活を話した	「M」と呼んで、夫婦で可愛がった。うちのお父さん、大きな声出したことない。怒鳴られたことも、たたかれたこともない。私の方が、ぎゃあぎゃいうの。	30分	*職員が人形の名前「M」(夫にちなんだ名前)提案し、決定 *下剤を飲み、ウロウロしていたが、赤ちゃん人形療法中は落ち着いていた。
	11月	6	妻	職員は、妻の話をよく聞いてリアル小の人形を見せた。	人形を見て笑顔	表情が和らいだ。妻は赤ちゃん人形をなで、「かわいい」を連発した。子どもが死亡した話にはならなかった。	入浴日に、女性職員が夫を手引き歩行している姿を見て、妻は若い女と手をつないでいると言ったヒステリックになった	その後「夫に見舞いに来て欲しい」と語った。職員が「お父さんに見舞いに来てくれるよう言っておきます」と言うと、はにかむ様子が見られた。		
第 3 段		7	妻	施設外へ移動。「この子もいますよ」と妻にリアル大の人形を渡した。	笑顔	大事そうに人形を抱き、「長い睫毛して、おめめ大きい」と言ってあやした。「冷たい」と言って人形の足をさすり、ずっと人形を抱いていた。「かわいい」とずっと人形を抱いていた。	「いいとこやな」と話した。	夫に対する不満の発言は見られなかった。		施設外で昼食をした。普段より沢山食べた。
	12月	8	妻	リアル大の人形「連れてきました」と渡した。	笑顔	人形を抱き、顔を眺めながら「大きい目している。長いまつげして、うちの下の娘も長かった」と語った。「かわいい」と人形をゆすりながら抱きた。「名前付けましょうか」と語りかけると「Gちゃん」(下の娘の名前と応えた。「言い名前ですね」と言うと、照れ笑いしながら、終始人形の頬をつつきながら、抱いていた。	「娘がよくしてくれる」など娘の話	夫に対する不満の発言は見られなかった。	20分	*人形の名前「Gちゃん」と妻がつけた
	1月	9	妻	居室にリアル大の人形を持って訪室。「この子の名前覚えてますか」と話しかけた。	笑顔	名前を尋ねると、少し考えて「Gべ・G・Gちゃん」と反応した。「寒いやろう」と言って人形を布団の中に入れ、横になった。「しゃべる相手がいなかったから淋しかった」「話している気が紛れる」と語った。	「足が痛い。」と訴えた。「デイルームで話をしたり歌ったりすると気分が変わるよ」と働きかけるも横になっていると拒否。	夫について「うちの人の、ひとつも見舞いに来てくれへん」と訴えた。職員が夫に伝えておくと、照れ笑いしながら「かまへん」と語った。	25分	夫婦とリアル大の人形が写った写真を妻の部屋に貼った。妻は居室で横になっていた。名前Gちゃんと認識

第 3 段	階	1月	妻	デイルームのテーブル席で入所者同士話しているところにリアル大の人形を持って行き、「この子の名前覚えてますか」と語りかけた。	笑顔	名前を尋ねると、少し考えて「Gちゃん」と回答した。「覚えていてくれたんですね」と言うと、「わからん」と言いながら、人形を抱き、「冷たい」と言って人形の足をさすった。職員が人形をテーブルの上に座らせると、「上手に座って」といい、服を直した。他の利用者が人形を抱きあやすも、怒ることなく眺めていた。		夫に対する不満の発言は見られなかった。	20分	
			夫婦	リアル大と小と和風の3体の人形を「連れてきた」と言って渡した。	笑顔	妻は「あー来ていたの」と言ってリアル大の人形を喜んで抱いた。夫がリアル小を抱いているのを見て、「お父さんとここにもいる」と言って微笑んだ。夫はすぐ人形を机の上に置いた。リアル大だけにすると、夫婦で人形を眺めた。	夫「これ大きくなったら、偉いことやで」妻「大きくならへんかったら化け物やで」子どもについて「小さいとき死んだんや、生きていたらおおきくなったらやろうね」と話した。			妻が人形を抱き、その横で夫が昼寝
第 4 段	階	2月	夫婦	「買い物に行こう」と夫婦をスーパーへ誘い、車の中でリアル大の人形を渡した。次に和風の人形を渡した。	笑顔	「あー寒かったやろ」といって、足をなでた。和風の人形に対して「この子毛が3本で寒そうや」と言って抱いていた。リアル小の人形に対して「あー来たの。おばあちゃんとおいで」と言って抱いた。	買い物の話やお金の支払いの話 出生地の話	店内では、妻は車椅子に乗り、夫が押した。何か飲むかと聞くと「温かいのがいいなーお父さん」と夫に語りかけた。夫は「何でもいい」といい、結局コーヒーにした。昼食時、妻は夫に「お腹すいたね」と語りかけ、2人で仲良く食べていた。食事中、妻はお茶の心配をしたり、「お父さんこれ食べ」と世話をやいた。「金なかったけれどこの人優しいからやってこれた。酒もタバコもしない」と繰り返した。		施設外での食事に誘った。妻は「この支払い大丈夫ですか？」とお金の心配をした。「お父さん楽しかったね」とご機嫌であった。
		3月	妻	リアル大の赤ちゃん人形を持って訪室する。「久しぶりに持ってきました。この子覚えてますか」と言ってリアル大の人形を渡した	笑顔	「もう忘れた。あかん」と言いながら、少し考えて「Gベ・G」等と言いがなかなか出てこなかった。「Gちゃんです。思い出しましたか」と言うとうなずき、抱きながら「寒いやろ」と言って、布団の中に入れ、しばらく一緒に寝た。		デイルームで並んで座っている。食事の時は並んですわる。食後は、妻は部屋で休む。夫はデイルームで昼寝したり、椅子に座っている。		妻はベッドに横になっていた。職員が「どうしたの」と問うと「膝が痛い。横になると楽になる」とのことだった。名前Gと認識
	階		妻	「久しぶりですね」と言ってリアル大の人形を渡した。	笑顔	顔がほころんだ。大事そうに抱きながら、「寒い寒い」と言って人形の足をさすった。「この子覚えてますか」と問うと、少し考えて「Gちゃん」と回答した。「大きい目目をして」といって抱き、あやした。	人形の名前を、けんぼうと呼んでいた。 淋しという。	デイルームで並んで座っている		居室のベッドに座って淋しそうな表情をしていた。



第4段階	4月	15	夫婦	ダイルームのソファに夫婦が並んで座り、話している所にリアル大の人形を持って行き、妻に手渡した。	笑顔	妻は、顔をほころばせ、「お父さん、この子かわいいね」と語った。「寒い寒い」と人形の手や足をさすり、大事そうに抱いた。夫は隣でうとうとしながら、人形の頬に触った。妻は、人形に夫の名前を付け、その名前を呼んだ。「女なの子じゃないんですか」と職員が問うと「男の子」と言い、しばらく抱いていたが、「重い」と言って人形を手放した。		ダイルームで並んで座っている		人形療法後も夫婦2人がソファに座ってくつろいでいた。
		16	夫婦	「久しぶりでず」リアル大を連れて行った。	笑顔	手足が痛いといいながら、人形をあやした。「可愛い」と言って毛布で人形をくるんで寝かせた。「つぶさへんかな」と心配そう。				
		17	夫婦	「連れてきました」とリアル大を渡した。	笑顔	夫婦2人で「ほらほら」とあやした。音が人形の頬に触ると、妻は夫の頬に触り、「ざらざらや」と言った。	男の子産んでよかった。死んだけれど	ダイルームのソファで実施。	30分間 夫の名前でかわがった。	
第4段階	5月					夫は「顔色悪いな。具合悪いんか」と声かけしていた。妻が受診した後、「どこへいったんや。わしは寝ているしかできひんのやな」と言っていた。				妻5月7日～10日 体調不良。救急車で受診
		18	夫婦	リアル大を持って具合を窺った	愛想笑い	いつものように、人形を抱かなかった。	「お父さん、男の子がほしかったんやろ」と語った。			「早く良くなってね」と言うも愛想笑いをしていた。
		19	夫婦	夫と共にリアル大を持って声かけをした。	笑顔	リアル大の人形を示し、足をこそぼるってみせると、「こそばゆいよ」といった。	夫が「がんばれよ」と言うと、「お父さんもがんばってね」といって、夫の肩をたたいた。	夫が妻を励ます。	60分	妻体調不良
第4段階	6月	20	夫婦	リアル大の人形を持って訪室した。	笑顔	かわいいと言って人形を抱いた。亡くなった子の名前を教えてくれた。「お父さんかわいそうやったわ、女の子ばかりで」と語り、「女の子が2人いた。今どれくらいかな、高校生くらいかな」と語った。		トイレ誘導すると、お父さんも行ってきいなど心配りをした。夫の姿を探すこともない。昼食は一緒に食べたが、食後は居室に戻り、一人で休む。夫との距離感が持っていた。	35分	35分間。 夫はダイルーム、妻は居室
		21	妻と他の入居者	ダイルームで、妻を含む3人の女性が座っているテーブルで実施。	笑顔	「どうしたの?」と言って人形を抱き、あやした。「名前覚えてますか」と問うと「わからない」という。	お父さんは〇〇、夫をさして、この人は△△、私は××、ややこしいなーと話す。妻は「この子髪の毛ないな」「お父さんもないのよ」と話した。		30分	30分間 ユーモアが聞けた 夫の名前を人形につけた。

第	7月	22	夫婦	ダイルームで夫婦がくつろいでいるところに人形を持って行った。	笑顔	妻が人形を抱き、夫が横からほっぺをさわった。「大きい目をしているな。長いまつげ長かった。娘は2人とも片付いている。今は楽しってもらっている」と語った。	花火を見に行ったときのこと。夫は妻の後ろに手を回し首をもんだりし、妻は夫の膝の上に置いている光景がみられた。	お父さんな声出したことない。私の方がガミガミ言っている。お父さんがいると安心する		
			妻	居室でベッドに横になってのいる。「足の具合はどうか」と声をかけた。人形用いず。	笑顔なし		具合を尋ねると、まだ少し痛いとのこと。お父さんがいると安心するわ	お父さんがいると安心する。		妻は足の痛みを訴えていた
4	段階	8月	23	ダイルームに夫婦2人でいるところに、リアル大人形を持って行った。夫婦の間においた。	笑顔	夫は頬をつついた。妻は人形を引き寄せ「寒くないか」といって手足を温めた。「大きい目しているな」といってじっと見つめていた。夫が人形にさわっても怒ることなく、見守っていた。	花火がきれい	妻は、夫のことを大きな声出したことない、私の方がガミガミ言っていた。部屋にお父さんがいると安心する。昼食時、妻は、おしぼりで箸を拭き、夫に渡す。妻の配膳が先になると、「お父さんのは？」という。「お父さんにお茶入れてあげて」と世話をやく。「お父さんのそばに行きますか」と職員が話しかけると「私もたまには女友達と話したいこともあるの」との返答があった。	30分	花火見物した。夫は妻の背に手を回し、妻は夫の膝に手を置いていた。

## Ⅶ. 考 察

1年間にわたり赤ちゃん人形療法を実施してきた。妻の攻撃性は、介入後1か月頃から軽減し、夫に対する不満や嫉妬心は介入後4か月から徐々に軽減し、その後はなくなった。それだけでなく、夫を思いやる言動が見られるようになった。そして、介入後6カ月が経過した平成22年1月末から夫婦が同室で生活できるようになった。この変化に赤ちゃん人形療法が果たした役割について考察した。

### 1. 妻の攻撃的な言動の背景

妻の攻撃的な言動は「夫がいてくれると安心」という発言より、不安や寂しさが起因していると考えられた。その根拠として、第1に、妻が語る生活史は、「お父さん」という言葉が実の父親であったり、夫であったり混沌としており、夫婦で作り上げてきた生活史が正しく想起できないこと、第2に、妻は女性職員に手をひかされている夫を見て浮気と思うなど、正しく認識する能力が低下していることが挙げられる。室伏が言うように、生きる拠り所になる生活史を失い、不安な世界にいたと推測

できる。人は受け入れがたいストレスに出会ったとき、不安、抑うつ、怒り、孤独感、ストレス反応を呈するといわれている<sup>11)</sup>。妻の攻撃的言動は、物忘れや判断力・認知力の障害などの中核症状を背景にしたストレス反応で、膝や肩の痛みがそれに影響していたと考えられる。妻の心理の根底にあるものは、「夫と一緒に居たい」「夫の気持ちを引き付けたい」等の愛されたいという欲求であったと推測できる。しかし、妻には自分のイライラ感や不安な気持ちの原因が分からず、また適切に対処行動がとれないので、不安感や焦燥感が増し、それが夫に対する暴力的言動となって表現されたものと思われる。その行為が夫と一緒に居ることを不可能にし、一緒に居られないからますます焦燥感が増すという悪循環になっていた。

認知症の中核症状は記憶の障害、認知機能の障害などの知的機能障害である。そのため、過去の記憶が想起しにくく、新しい出来事の記銘が困難となり、事態を予期することは不可能に近い。従って、認知症高齢者の世界は「今、その時」がすべてであり、情動も「今、その時」

の快・不快に左右されやすくなる。室伏は、「痴呆性高齢者がそれまでの生き方の拠り所としていた知的能力や生活史を失い（健忘）、人間関係も失うことによって、生きる不安（存在不安）が起きることが、本質的な問題である」と述べている<sup>9)</sup>。すなわち、自分はどうなってしまったのか、これからどうなっていくのだろうか、このまま存在していいのだろうかという不安である。あるいは、周りで起きていることが理解できず、自分が取り残されたという思いに襲われ、このままでいいのかという不安である。

このような不安が背景にあり、焦燥感やイライラ等のBPSDが出現したと推測できる。不安感に視点をおき、できるだけ安心感が大きくなるようにケアすることが認知症ケアの本質である。

## 2. 赤ちゃん人形療法の効果

赤ちゃん人形を抱いて過ごしてもらうだけでは療法と言えない。対象の心理を把握したうえで、それに見合ったかわりをして、初めて療法といえる。

赤ちゃん人形に対する妻の態度は一貫して、「かわいい」「娘も目が大きかった」と言って笑顔で人形を抱き、「寒い寒い」と言って赤ちゃん人形の手足をさする言動が見られた。この言動は、対象をいとおしく思いやり、愛情に裏打ちされた行為である。妻の赤ちゃん人形をかわいがる言動は、妻自身が主体的かつ能動的に、他者（赤ちゃん人形）に愛情を注ぐ行為である。かわいがることを継続したことにより、愛着感が満たされていったと推測できる。また、赤ちゃん人形の寒さを和らげる行為は、いとおしく思うからできる行為であり、弱者と認識して、世話をやく行為である。自分にできることを他者（赤ちゃん人形）に施すことで、役割意識を自覚し、そこから自分らしさを取り戻していったと推察できる。認知症高齢者の心理的ニーズについて、Kitwood T. は「慰め（安定性）」「愛着（絆）」「帰属意識（仲間入りのニーズ）」「没頭性（役割意識）」「自分らしさ（物語性）」の5つがあり、いずれかが安定すると波及効果があると述べている<sup>12)</sup>。妻にとって赤ちゃん人形は、愛情を注ぐ対象であり、役割意識を取り戻す対象であったと考えられる。日常生活の中でこの心理的ニーズが満たされることが、安寧な生活をする上で重要である。

赤ちゃん人形に名前を付けることは、人形全般ではなく、固有の意味を付加した特別なものである。第1段階では赤ちゃん人形に名前を付けることができなかったが、第2段階では職員の提案で、夫の名前にちなんだ名前がついた。第3段階では、妻が「G」と娘の名前をつけ、第4段階では夫の名前に変わった。名前を付け、名前を呼んでかわいがることは、人形一般に愛情を注ぐのではなく、特定の対象に愛情を注ぐことに他ならない。妻に

とって、人形の意味は自分が愛情を注ぐ対象であったと考えられる。娘や夫の名前をつけたことから考えると、娘や夫に愛の拠り所を求めていると思われる。

Winnicottは、母親がそばにいない時に子どもを慰め落ち着かせる母親の代理になるものとして移行対象（transitional object）という概念を示している。移行対象は、母親との分離の痛みに対する緩衝材としての働きをしたり、さらに大切なものを失った後に、新たな世界を獲得する「橋渡し」になるとも述べている<sup>13)</sup>。一人でいることの不安や満たされない愛情欲求を、自分がしてほしいことを移行対象である人形にすることで、その思いを満たす。また、移行対象は、人が成人してからも、さまざまな現実との葛藤に際して、現実との橋渡しとして現れると述べている<sup>13)</sup>。

すなわち、妻にとっての赤ちゃん人形は、夫から愛してもらいたい気持ちを人形に託し、自分が人形を愛することでその気持ちをみたとする移行対象であったといえる。妻にとっての赤ちゃん人形の意味は、第1段階では可愛いという気持ちを注ぐ対象の総体としての意味、第2段階では夫と赤ちゃん人形が重なり始め、第3段階では赤ちゃん人形と娘を重ね、よくしてくれるという感謝と子どもを育てた役割を感じ、第4段階では夫婦として関係性を確実していったことにあると考える。

当事者が持つ欲求や不満は様々であるが、当事者が赤ちゃん人形にその気持ちを移行し、気持ちを表出することで、当事者が癒される。その媒介に赤ちゃん人形が役割を果たしていると考えられる。

気持ちを移行する対象は、他にもいろいろあるが、赤ちゃん人形の特徴は、ヒトの形をしており、可愛く、小さく、丸く、柔らかいなどである。人の形をしているので、魂のある物として認識されやすい。また、人は、小さく、丸く、柔らかいものを可愛く感じるといわれている。視覚や聴覚からの情報が、大脳辺縁系にある記憶を蓄積する扁桃体の引き出しから記憶を引き出すことによって感情が生まれる。記憶はその時の感情と共によみがえることもあれば、感情だけがよみがえることもある。扁桃体は視覚や聴覚から入ってきた情報を過去の記憶と照らし合わせて嫌なことなのか、楽しいことなのか振り分けている。この機能によって、私たちは感情を表現するだけでなく、価値判断や多様な思考を展開することができる<sup>20-22)</sup>。

この事例の場合、赤ちゃん人形を男と認識した情報は、腸閉塞で死亡という悲しい記憶につながり、「睫毛が長い」や「目が大きい」なその視覚情報は、良くしてくれるという娘の記憶につながったといえる。不快の感情はACTHやノルアドレナリンやコルチゾールなどの神経伝達物質が分泌される嫌悪系神経回路のスイッチがオンになり、感謝の気持ちや快の感情は、ドーパミンやセ

ロトニンなどの神経伝達物質が分泌される報酬系神経回路のスイッチがオンになる。報酬系神経回路からの神経伝達物質が分泌されると、最適な状態になるように調整機能が働く<sup>21)</sup>。妻が笑顔になったことは、報酬系神経回路のスイッチが入り、快の感情が優位になり、その結果、暴力や暴言の軽減につながったと思われる。子育ての体験は忘れにくい記憶である。従って、ヒト型の人形は、かわいさとの相乗効果で、子育ての記憶とむすびつきやすいといえる。

### 3. セッションの妥当性

今回のかかわりの基本は、月に2回程度の頻度で、1回のセッションは30分程度、妻が好んだ赤ちゃん人形を用いてコミュニケーションを図ったことである。

3体の赤ちゃん人形の中で、妻が好んだのはリアル大であった。この人形に対する発言は、「じっと私を見ている」「大きな目をしている。娘の目も大きかった」「長いまつげをしている。娘もまつ毛が長かった」などであり、笑顔で語っている。妻は、リアル大の赤ちゃん人形の特徴から娘をイメージし、娘がよくしてくれていることへの感謝の気持ちにつながっている。それは、妻の「娘がよくしてくれる」「楽しんでもらっている」という発言から推測できる。リアル大の人形に青い服を着せた時は、男の子のイメージになり、乳児期に腸閉塞で亡くなった息子の思い出につながり、暗い話になった。服の色を変えてみたが、しばらくは顔を見て男の子として認識していた。しかし、時間経過の中で、赤ちゃん人形のかわいさ、目の大きさ、まつ毛の長さに関心が集中し、娘のイメージへとつながり、「よくしてくれる」という言葉に代表されるように感謝の気持ち、すなわち快の感情に変化している。快の感情は、海馬につながるA10神経を刺激し、神経伝達物質であるドーパミンを分泌する<sup>14)</sup>。快の感情が優位になることは、即ち穏やかになることであり、これが攻撃的言動の軽減・消失につながったと考える。

人は同じものを見ても、見方や感じ方は異なる。それには単に感性だけの問題ではなく、生活史と深く結び付いている。人の生活史は十人十色であるから、自分の生活史にフィットした赤ちゃん人形を当事者に選択してもらうことが赤ちゃん人形療法を行う上のポイントと考える。今回は、今までの研究成果<sup>9)</sup>をふまえて3体の赤ちゃん人形を準備し、自分の好む人形を選択してもらった。妻がリアル大の赤ちゃん人形を好んだのは、目の大きさやまつ毛の長さが娘のイメージにつながったためではないかと推測する。認知症高齢者は記憶の想起が困難であるが、何体かの人形を比べることで、自分の求めるものが分かってくるとと思われる。

また、選択することは、自主性を育むうえでも重要で

ある。しかし、沢山の中から選択することは迷いを誘い、混乱させることにもなる。数体の中から、自分に合ったものを選択できるようにすることが支援の重要なポイントである。

セッションの時間は、長くて1時間、短くて15分程度であった。人間の集中力は15分と言われている。加齢とともに、集中力や下肢筋力や腕力が低下する<sup>15~17)</sup>。したがって、赤ちゃん人形を長く抱き続けることは困難である。実際に15回目のセッションでは「重い」と言って、赤ちゃん人形を置く場面もあった。疲労すると快の感情は生まれにくい。1回のセッション時間はおおむね30分程度が妥当と思われるが、設定時間の有効性については十分検討するには至っていない。効果的な時間設定については今後の課題である。

赤ちゃん人形療法を行うことで、職員と対象者がかかわる時間が日常より長くなり、視線も対象者に向く。自分に注意・関心が向けられることは、快の感情をもたらし、安心感につながる。赤ちゃん人形療法の効果と職員からの自分に注がれる時間の長さが相乗作用をなし、安心感につながり、攻撃的言動が軽減したとも考えられる。

### 4. 他の働きかけとの併用

#### (1) 夫婦と人形の3者が映った写真の活用

夫婦は他人であり、血のつながりはないが、親と子どもは血縁で結ばれている。女性にとって、子どもを産み、育てた思い出は簡単に喪失するものではない。夫との縁は切れても、子どもと縁を切ることはできない。妻は、リアル大の人形を娘のイメージにつなげていた。また、夫婦の関係において、最初、妻は「お父さん」という言葉を多く発したが、実父のことを指していたり、夫のことを指したていたり混沌としていた。夫婦と人形の3者が映った写真を置いたことは、夫婦の間に子どもがいることの象徴になったと考える。リアル大の赤ちゃん人形が子育てのイメージにつながり、そこから、子育ての頃に夫が介在したことを想起し、その意識が強化されていったと考える。夫婦であることが確認できると、夫婦の絆へとつながる。この夫婦は、本来仲が良かったので、愛し、愛されたい感情につながっていったと思われる。その後も「お父さん」という言葉を発するが、意味するところは明確に夫であった。イメージ化する上で写真や映像などの媒体は具体的イメージにつながりやすいという研究結果も報告されている<sup>18~19)</sup>。

写真を提示した時期は、介入後5カ月ごろである。この時期は、妻は夫の存在をはっきり認識しだした頃である。混沌としている時期に、写真や映像を提示しても効果は期待できない。写真を眺め、夫婦で話すことが、夫婦である意識を高める。夫との生活を認識し始めていた時期に用いたことが、夫婦の絆の強化につながったと思

われる。

## (2) 買い物体験

夫婦同室になる前に2回、同室後に1回、買い物などの取り組みを実施した。外出には赤ちゃん人形を持って行き、それを媒体にコミュニケーションを図った。妻からは「あんたも来ていたのか」との発言が見られている。夫婦は、買い物や外食を大変喜び、楽しんでいる姿があった。楽しみの中に、子育てのイメージが付加され、より夫婦の絆を確かめたと考える。暴言や暴力は全くなく、夫を思いやる妻の姿があった。

外出等のアクティビティケアは、気分転換に効果的であり、夫婦の関係性に作用している。今回の取り組みを時系列に見ると、赤ちゃん人形療法により攻撃性が減少してから、外出等のアクティビティケアを実施した。マズローのニーズの階層論で考えると、愛情や所属のニーズが満たされたので、より高次のニーズの充足に向かっていったと考えられる。このケースにとって、今後はより高次のニーズである「自己尊重」や「自己実現」を充足するケアが必要と思われる。赤ちゃん人形療法の効果と限界については、今後の課題である。

## VIII. 研究の限界

妻の攻撃性が原因で、夫婦が別々に生活していたが、赤ちゃん人形療法を実施することにより夫婦同室での生活が可能になった。しかし、赤ちゃん人形療法と平行して、外出等のアクティビティケアを平行して行っており、赤ちゃん人形療法のみが夫婦の変化に影響を及ぼしたとは言い切れない。今後は、事例数を増やすこと、観察項目を徹底すること、ストレス度などの客観的データを収集して、信頼性と妥当性の確保に努めていきたい。

## IX. 結論

認知症高齢者の攻撃性に対する赤ちゃん人形療法の効果を検証する目的で実践的研究を行った。本研究の対象は、妻の攻撃的言動が原因で、夫婦同室ができなかったが、赤ちゃん人形療法開始後から攻撃的言動が減少し、介入6ヶ月後から夫婦同室が可能になった。その変化と赤ちゃん人形との関連において、以下のような示唆を得た。

1. 認知症高齢者が、赤ちゃん人形に自分の気持ちを投影し、そのことで安心感を得ることができる。赤ちゃん人形は認知症高齢者の心理の移行対象となっていた。
2. 赤ちゃん人形を抱きっぱなしでは療法とは言えない。対象者に好きな人形を選択してもらい、対象に合わせた時間設定などをしていくことが重要である。今回の世に写真を利用や買い物に行くなど、対象者の状況に

合わせた方法を並行して行うと相乗効果が得られることが示唆された。

3. 赤ちゃんの特徴である、可愛さ、小さい、柔らかさは笑顔を誘い、快の感情につながるということが示唆された。

## 謝辞

本研究に快く参加していただきましたご夫妻およびご家族、ならびに共同研究に取り組んでいただきました施設の職員の皆様、論文作成に当たりご指導いただいた諸先生方に深く感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 厚生統計協会、国民衛生の動向、2010/2011
- 2) 介護白書(平成18年版),社団法人全国老人保健施設協会,ぎょうせい,2007
- 3) 「老人保健福祉計画策定にあたっての痴呆老人の把握方法等について」平成4年2月老計第29、老健4号
- 4) 室伏君子、メンタルケアの実践的原則、老年期地方診断マニュアル、日本医師会、1995
- 5) 芹沢隆子:心を活かすドールセラピー,赤ちゃんの人形療法,出版文化社,2003
- 6) 山里尚子、田場真由美 栗栖瑛子:施設利用の認知症高齢者のロボット型人形に対する反応の分析 ロボット型人形の提示前後の比較、日本看護学会論文集 老年看護38号 p208 210 2008.2
- 7) 田村俊世、中島一樹、南部雅幸、中村加銘子、米満里美、伊藤朗子、東祐二、藤元登四郎、宇野広:重度痴呆性高齢者看護支援のための人形療法,日本バーチャルリアリティ学会論文誌,Vol.6 No3 2001
- 8) 親松恵子、畑野相子、山根寛:認知症高齢者が人形を抱くことの意味,精神認知とOT,Vol.2 No4 2005 p341
- 9) 畑野相子:認知症高齢者にとっての人形の意味と適合素材に関する研究、滋賀県社会福祉研究第12号 滋賀県社会福祉研究会 2010, 2
- 10) 岡本拓三 並河正晃 藤本直樹 森山美知子:高齢者医療福祉の新しい方法論、医学書院、1998. 10
- 11) 加藤 司:対人ストレスコーピングハンドブック、p55-p64、ナカニシヤ出版、2008.11
- 12) Tom Kitwoot,高橋誠一訳:認知症のパーソンセンタードケア,筒井書房,2006
- 13) Winnicott DW,橋本雅雄訳:遊ぶことの現実,p1-35,岩崎学術出版社,1979
- 14) 大村政男、井出雅弘監修、小林幹児編:回想療法の理論と実際,p26,アテネ書房,2006

- 15) 吉川敏一：アンチエイジング医学、その理論と実践、診断と治療社、2006. 6
- 16) 日本抗加齢医学会専門医・指導士認定委員会、アンチエイジング医学の基礎と臨床、2007. 2
- 17) 安藤進 鈴木隆雄 高橋龍太郎（財）東京都老人総合研究所:老化のことを正しく知る本、中経出版、2000. 8
- 18) 宮坂忠夫 川田智恵子 吉田亨：健康教育論p129-130 2006.1
- 19) ダレ・トヤ、渡邊岸子：個人回想法の実施方法及び評価方法に関する検討、新潟大学医学部保健学科紀要9巻2号、141-146 2009
- 20) 米山公啓：脳の地図帳、青春出版社、2009. 7
- 21) 林啓子、林隆志：笑み筋体操、法研、2008. 9
- 22) 橋本嘉男：笑い与健康、笑い与健康の感動療法(Thanks Therapy)、TT研究会出版部、2008.2

## (Summary)

# The effect of the baby doll treatment over a elderly dementia person's aggressiveness

Aiko Hatano<sup>1)</sup>, Takako Kitamura<sup>1)</sup>, Chizu yasuda<sup>1)</sup>,  
Yuuko Shimada<sup>2)</sup>, Yasuhide Mifune<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

<sup>2)</sup> Old man welfare institution Shinseien

<sup>3)</sup> Maho-maho dole therapy meeting for the Study

**Background** Elderly dementia persons are increasing in number with aging. The correspondence to psychology and action condition is difficult at a cognitively impaired elderly person's care. Various nonpharmacological therapies as a care of the heart are tried. Although a doll treatment is also positioned as part of that, research is seldom progressing.

### Objective

**Purpose** The viewpoint was hit to the aggressiveness of psychology and action condition, and practical research was done for the purpose of verifying the effect of a baby doll treatment.

**Methods** Elderly-people husband and wife with 1 set of dementia which has entered nursing-care welfare facilities for the aged. The baby doll treatment was performed for one year mainly for the wife who has aggressiveness.

**Results** The wife's aggressiveness disappeared around from after-intervention one month, it reduced gradually from after-intervention four months, and the dissatisfaction to a husband and the jealousy heart were lost after that. It does

not come out so much and the speech and conduct which sympathize with a husband came to be seen. And husband and wife can live now on the same room from the end of January, Heisei 22 after-intervention six months passed.

**Conclusion** Offensive speech and conduct decreased by the baby doll treatment. The following things were suggested as the factor.

1. A elderly dementia person can project his feeling on a baby doll, and can get sense of security by that. The baby doll has been the shift target of a elderly dementia person's psychology.
2. A synergistic effect will be obtained if the method united with the candidate's situation is taken in to a baby doll treatment.
3. This which invites a smiling face makes feeling of predominance, and the loveliness which is a baby's feature, and small softness lead to the stability of a feeling.

**Key Words** Baby doll treatment Aggressiveness Elderly dementia person Non-medical therapy Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia